幕末・明治初期の小笠原における国際関係（補助資料）

第 88 回カルチャーセミナー

2023 年 9 月 10 日（日）於、柿生郷土史料館

岩本陽児　（和光大学、現代人間学部）iwamoto@wako.ac.jp

講師略歴、長崎・三菱高島炭鉱生まれ。九州大学文学部史学科卒業（考古学)、九州大学大学院教育学研究科（社会教育計画論)、1991 年日本政府派遣留学生として、英国レディング大学・レスター大学に学ぶ。1993 年再渡英。教員を経て 2002 年引き揚げ、和光大学に着任。2019 年度の在外研究で首都大学東京（当時）客員研究員として父島に移住。社会教育学・生涯学習論、環境史、日欧文化交渉史。「岩倉使節団の米欧博物館見学--イギリスを中心に」で、第二回全日本博物館学会賞。市民講座和光大学ぱいでいあ「英語で読む、英国ガーデニングとカントリーサイド」。「原著で読む「岩倉使節団」報告書」を、2024 年度に開講予定。

内容

I 小笠原諸島について
II 大航海時代の欧州諸国が見た小笠原
III 17 世紀後半、阿波船の遭難と生還→幕府調査隊派遣
IV 歴代小笠原一族による渡航申請と、追放刑
（南の夢の島のパブリックイメージの国内普及）
V 欧＞日＞欧　小笠原に関する「知識」の還流
VI 欧米捕鯨国から見た 19 世紀の小笠原＝Bonin 諸島
VII 江戸幕府から見た小笠原＝無人島
VIII 外国奉行（咸臨丸）による小笠原「回収」と命名
IX 明治政府による小笠原「再回収」

I, 小笠原諸島について

小笠原諸島は、東京から南約1,000km の太平洋上に散在する30余りの島々の総称

―小笠原群島（聟島、父島、母島列島）

＜父島＞　23.45 ㎢　千代田区の約2倍余り

＜母島＞　19.88 ㎢　北区とほぼ同じ

―火山列島（硫黄列島）

―三つの孤立島（西之島、南鳥島、沖ノ鳥島）

―人口のピークは1944年（昭和19）年、軍令で、壮丁を除く6,886人の島民強制引き揚げ。

―敗戦後、欧米系住民のみ父島に帰島。米海軍統治。

―1968年に施政権返還。23年の空白を経て、旧島民の帰島。

―現在は父島（2135人）母島（457人）にのみ居住。故郷に帰れない旧硫黄村民。

―「欧米系、旧島民、新島民、新新島民」転勤族、公務員と子どもの多い国境の村。

―動物　特別天然記念物 アホウドリ、メグロ。天然記念物 オガサワラオオコウモリ、アカガシラカラスバト、オガサワラノスリ、オカヤドカリ、昆虫類､陸貝等多数生息

―植物　亜熱帯性のもの多数（ムニンツツジ、ムニンノボタン、アサヒエビネ、ワダンノキ、ムニンヒメツバキ、タコノキ他固有種多数）

―2011年、世界自然遺産（海洋島における生物進化）屋久島、白神山地、知床に続き日本で4番目。（その後奄美・徳之島・沖縄北部が指定。）

II 大航海時代の欧州諸国が見た小笠原

●「金銀島」探索　16 世紀半ばから17世紀前半のヨーロッパ艦隊が、日本近海に来航＞得撫島・択捉島発見。

―1543年（種子島鉄砲伝来の年）　スペイン第四東洋遠征艦隊のサン・ファン号、火山列島を命名

―1639年　　オランダのクワスト及びタスマンが、沖ノ鳥島・北硫黄島・母島列島・父島列島・聟島列島を望見

―1643年　　オランダのド・フリースが小笠原諸島を発見

―1702年　　スペイン船ロザリオ号が西之島を発見、ロザリオ島と命名。

―1727年　　長崎・出島に駐在した医師エンゲルベルト・ケンペルの『日本誌』刊行。ブネシマの名で小笠原を紹介。地図に記載なし。

―1779年　　キャプテンクックの艦隊が硫黄島を目撃し、サルファ・アイランドと命名

III 17 世紀後半、阿波船の遭難と生還→幕府調査隊派遣

—1593（文禄 2）年　　信州の小笠原貞頼による、小笠原発見伝説（後述）

—1668（寛文 8）年　　勘定奉行岡田豊前守が長崎奉行末次平蔵を江戸に招き、欧州船を模した 500 石船の建造を命じる。

—1670（寛文 10）年　　500 石船の完成「富国寿丸」と命名。長さ 30m、3 本マスト。

●前年暮れに紀州を出た阿波の国浅川浦の勘右衛門船、遭難。2 月に母島漂着。八丈経由で、伊豆に着船。下田奉行の事情聴取。

—1674（延宝 2）年、　　幕府、富国寿丸での「人無嶋」への探検を、船頭嶋谷市左衛門に命じる。「八丈島辺ニ人無嶋有之ニ付」

—閏 4 月に下田を出帆。八丈島、青ヶ島、鳥島経由、4 月 30 日に「宮之浜」に停泊。翌日上陸調査。5 月 15 日に母島に向かい、翌日から調査。5 月 19 日に南島で一泊して、父島再調査。大村、奥村、洲崎村、本村など命名。6 月 5 日に父島発、12 日に下田着。嶋谷は『無人島乗前図』などを作成、持ち帰った標本とともに幕府に献上。（のちに下げ渡し）

IV 歴代小笠原一族による渡航申請と、追放刑

—1674（延宝 2）年 8 月　小笠原長啓（貞頼の孫）の小笠原渡島請願。沙汰なし。

—1702（元禄 15）年　　小笠原長啓の再出願。差し支えなし。資金難から頓挫。

—1727（享保 12）年　　小笠原貞頼の曽孫宮内貞任が、小笠原渡島の再々出願。大岡越前が吟味。翌年御免許。

—1733（享保 18）年　　貞任の甥、民部長晃が 300 石船で大坂から小笠原に向かい、消息不明。

—1735（享保 20）年　　幕府は信州の小笠原宮内貞任は小笠原家と無関係と判断、重追放[1]に処す。

---

[1]重追放じゅうついほう

　江戸幕府の追放刑の一種。「公事方御定書」によれば，その立入禁止区域の御構(おかまい)場所は，武蔵・相模・上野・下野・安房・上総・下総・常陸・山城・摂津・和泉・大和・肥前・東海道筋・木曾路筋・甲斐・駿河および犯罪者の居住国と犯罪を犯した国とされた。(コトバンク)

V 欧＞日＞欧　小笠原に関する「知識」の還流

―1783（天明 3）年　　　林子平『三国通覧図説』＜長崎オランダ商館長による小笠原情報

林子平（1783）より、抜粋

○私按ずるに彼の嶋八十余嶋の中、第一の大嶋廻り十五里なるときは壹岐の島に比すべし。その次の大島廻り十里なるときは天草嶋に比すべし。その余廻り二里以上六七里に及ぶもの八嶋有り。すべて此の十嶋は湊あり平地あり人居住すべし、五穀植うべし。且つ暖気の辺地なる故、珍異の物を産するなり。其余七十余山は岩石小嶼なれども亦小さく、物を産するなり。これに因りてひそかに工夫すれば、この嶋へ人を蒔きて樹芸を為し、村落を建立して山海の業を起こし一州の産物国を仕立てて後、此の嶋渡海の常船を造りて歳に一渡海して産物を収むべし。船を造るの費は一渡海にて償うべし。是尋常商估の知らざる所なる故、後業のためにここに記すなり。願わくば好事の商估憤発して此の業を興さば巨万の利、目前にあるべし勉之勉之。＜**ここまで林の意見**

安永年中小子肥前の鎮台舘に遊事して崎陽に至りオランダ人ア、レントウェルレヘイトに会ふ。ヘイト其地理書ゼオガラヒーの説を談じて、日本の辰巳二百余里に嶋あり。ウースト・エーランドと名づく（ウースト・エーランデンと複数形だった、岩本）。ウーストは荒地、エーランドは島のこと也と語れり。又言いて日く、此の嶋無人なれども草木多きを見れば不毛とは言い難し、日本より人を蒔きて一州の地となして五穀産物等を仕立ば海遠からざる故、大利あるべし。オランダよりコンハンヤ（ポルトガル語 companhia= 会社、岩本注）を立てるには海遠く国小にして費にあたらずと云へり。小子ヘイトが言を然りとす。よって亦復参考のためにここに記すのみ。無人嶋略説大尾＜**オランダ商館長の発言・引用**

―1817 年　　　　　パリの東洋学者レミュザが、林『三国通覧図説』をもとに、小笠原諸島をボニン諸島と命名。＞英国王室御用達の地図・海図業者アロウスミスが記載。他の業者も採用して普及。岩本（2020）参照

VI 欧米捕鯨国から見た 19 世紀の小笠原＝Bonin 諸島

●捕鯨船の西漸と、乱獲による航海の長期化　鯨油は諸産業の基。（石油開発は、1855 年以降）

―1824 年　　　英国捕鯨船トランシット号が母島沖港に入り、船長の名にちなんでコフィン港と命名。

―1825 年　　　同・サプライ号が父島二見港に入港。

―1826 年　　　同・ウィリアム号が父島来航。暴風で遭難。数か月後に同・ティモア号に救出される。

―1827 年　　　英国軍艦ブロッサム号（ビーチ―艦長）が父島に停泊。諸島を測量し、6 月 14 日づけで領有の銅板を残す。＜従来説では英政府はこれを認めなかったとされていた。

―1828 年　　　ロシア軍艦セニヤウイン号で、探検家リュトケが来航。博物学調査を実施。（リュトケはロシア政府に小笠原諸島のロシア領編入を提起したが、国内情勢不安のため応じられず。）

（1829 年、シーボルト追放）

—1830 年　　最初の入植。ハワイ王国オアフ島から欧米系 5 名・カナカ人 15 名。移住団長のイタリア系英人マテオ・マザロは、オアフ島駐在英国領事から英国旗を持たされた。
—1831 年　　ブロッサム号のビーチー艦長が、『航海記』を出版。
—1834 年　　ハワイから広東に向けて航行中の英国商船ボランティア号が暴風雨で損傷した船体修理のために、二見港に入港。
—1835 年　　英国に一時帰国したマザロが、英国官憲による小笠原移住民保護を求める請願書を政府に提出。
—1836 年　　米国軍艦が二見港に寄港。軍医ラッシェンバーガーが貝類標本を持ち帰る。
—1837 年　　英国軍艦ローレイ号が、父島植民地の実情調査のため二見港に入る。
（1839～1842 年、アヘン戦争）
—1842 年　　マザロが英国捕鯨船でハワイに行き、移民の追加募集。英国領事代行の推薦状を得るも、ハワイ政府の反対により不調。
（1848 年、父島でマザロ没）
—1849 年　　英国の帆船ルイザ号、メイドオブオーストラリア号に続き、デンマークのセントアンドリュー号が香港から父島に来航
—1850 年　　父島を再訪していたセントアンドリュー号とメイドオブオーストラリア号が金品を略奪してサンフランシスコに向けて出帆。二見港に寄港した英国軍艦の通報により、下手人はホノルルで逮捕、処刑。
—1851 年　　英国軍艦エンタープライズ号が母島経由で二見港入港。島民に英国国旗と海賊に備えた武器弾薬を残す。帰国後の報告書でコリンソン艦長は小笠原諸島の「捕鯨船の避難港」としての重要性のみを指摘。
—1853 年　　ペリー提督の艦隊のうち、サスケハナ号、サラトガ号が二見湾に入港。カリフォルニア・中国航路の中継地として、ハワイと小笠原を考えていた（日本が開国拒否の場合の拠点とする説も）。ペリーはセーボレーを招いて、船舶用「貯炭場」として 67 ヘクタールの土地を 50 ドルで買い上げ、セーボレーを海軍に編入。免税、免役権を付与。アシスタントとして水兵を残す。牛・羊・山羊を陸揚げ放牧し、その飼育管理権限も、セーボレーに付与。6 月に那覇に向けて出港。
—同年 8 月　　長崎に向かうプチャーチンのロシア訪日艦隊が二見港に集結。セーボレー、自治政府を設立。
—同年 10 月　　ペリー艦隊プリマス号のケリー中佐が二見港に入り、自治政府の設立を確認。10 月 30 日づけの米国領有宣言の銘板を母島に埋設。
—同年 12 月　　香港停泊中の旗艦サスケハナ号に、英クランドン外相の命を受けた貿易監督官ボンハムがペリーを訪ね、正式抗議。（この時ペリーが「あらゆる国の国民が親切に受け入れられるべきであって、領有権を主張すべきではない」と述べたことが、日本領有権の伏線となったとの説あり。）
—1854 年　　ペリーの部下アボット艦長がマセドニアン号で二見港に来航し、セーボレーにペリーの書簡を届ける。農具・種子を全戸配布し島政府に米国旗を貸与して下田に向かう。
—同年 10 月　　米艦ブインセンネス号の博物学調査
—1855 年　　安政大地震で父島に大津波。父島を引き揚げる住民が多かった。
—1858 年　　石油の登場により、鯨油価格下落。太平洋捕鯨の衰退。

VII 江戸幕府から見た小笠原＝無人島

（1674（延宝 2）年の調査＝上述＝から 100 年余りの空白）

—1782（天明 2）年 3 月　幕命により 31 名からなる無人島探検が試みられるが 2 度の暴風に遭い、8 月に下田着。幕府による無人島探検の試みは打ち切りとなる。

●1783（天明 3）年　林子平『三国通覧図説』（上述）

—1838（天保 9）年　幕命により伊豆代官羽黒外記が無人島探検を試みたが、悪天候のために中断。（渡辺崋山の同行希望は許されず。）

—1840（天保 11）年　陸前高田の中吉丸が銚子に向けて航海中、鹿島灘で遭難。父島に漂着し、厚遇され帰還。帰国後、松平陸奥守の奉行所に報告。

—1841（天保 12）年　中浜万次郎の鳥島漂着。

—1846（弘化 3）年　オランダ商館長ビックが長崎奉行に、小笠原を外人に経営させていては後日の禍になると忠告。直ちに幕府に注進。

—1848（嘉永元）年　弟島に漂着の 5 人乗組日本船がフランス捕鯨船に救助され、内地送還。

（ペリー来航と開国）

—1860（万延元）年　日米修好通商条約批准のため、新見（しんみ）正興以下の使節がポーハタン号で米国に向かう。随伴の咸臨丸による小笠原巡検、実現せず。

—同年 5 月　外国奉行が軍艦奉行木村喜毅に無人島巡検を命じたが、中止。

—同年 10 月　駐日英国公使オールコック、小笠原は日本領かを幕府に照会。（次項につづく）

VIII 外国奉行（咸臨丸）による小笠原「回収」と（小笠原伝説を継承した）命名

—1861 年（文久元）年　江戸幕府が小笠原の調査と開拓のため、外国奉行 水野筑後守忠徳を隊長として咸臨丸を派遣。島民に領有宣言と開拓を伝える。（ロシア軍艦対馬占領事件の年）

—1862（文久 2）年　伊豆・八丈から小笠原父島に入植者を送り込む。

—1863（文久 3）年　生麦事件による英国との関係悪化で、幕府は小笠原の開拓中止を決定。開拓移住者の総引上げ。

＜幕末の動乱＞

IX 明治政府による小笠原「再回収」

1875（明治 8）年　明治政府が小笠原の再開拓着手を決定。実情探査のため「明治丸」で小花作之助・田辺太一ら外務・内務・大蔵・海軍 4 省の官員を派遣。島民 71 名に開拓再開と日本国による統治を宣言し、了承。

1876（明治 9）年　小笠原は内務省主管と決定し、寺島外務卿から各国に統治を正式通告。異議は出されず、小笠原は日本領として国際的に確定。

1880（明治 13）年　東京府の管轄となり、東京府小笠原出張所を設置。

1886（明治 19）年　小笠原出張所を廃止し、東京府小笠原島庁を設置。

1891（明治 24）年　火山列島を小笠原島庁の管轄とし、北硫黄島、硫黄島、南硫黄島と命名。

1898（明治 31）年　　　南鳥島を小笠原島庁の管轄とする。

＜植民・開拓、後年は南洋経営のゲートウェイ。「かぼちゃ御殿」の建つ、豊かな島＞

●明治丸について（東京海洋大学 HP より抜粋）

　1874（明治 7）年、英国のグラスゴーで建造。当初 2 檣で、補助帆を備えた汽船。翌 1875（明治 8）年から 1896（明治 29）年まで、燈台巡廻船。その後商船学校の練習船。

「海の日」1876（明治 9）年、明治天皇が東北・北海道巡幸の帰途、函館から乗船。7 月 20 日に横浜安着したことを記念。

おわりに　小笠原から見えるもの

　幕末・明治の日本は、欧米列強による植民地化の危機にさらされていたとの言説は、はたして実態に即したものだったか？

領有とは①実効支配②国民が居住③役所を設置

〇アヘン戦争のインパクト

〇植民地獲得・経営のコスト（利益を極大化させたいビジネスセクターvs コストを負担する帝国政府）

〇すでに香港を得た英国、ハワイを得た米国

〇日本の（不平等条約の下での）開国と列強による共同利用

〇対馬事件（資料）の解釈をめぐって＞「抜け駆けを許さない」欧米列強のパワーバランスの時代に入っていた？

ロシア軍艦対馬占領事件・資料

〇日本大百科全書

1861 年（文久 1）2 月から 8 月までロシア軍艦ポサドニック号（艦長ビリレフ）が、対馬芋崎 （いもさき） 近辺の租借権を要求して占拠した事件。その間、対馬藩は対応に追われ、警備にあたった島民が小競り合いの際に被弾し、また艦員に捕らわれた家臣が憤死するなど、緊張が続いた。幕府は外国奉行 （ぶぎょう）を対馬に派遣する一方で、ロシア領事ゴシケビチと退去交渉を行い、またイギリスの圧力もあって、ようやくポサドニック号は退去した。この事件は、欧米列強の東アジア進出により日本海と東シナ海を結ぶ対馬の戦略的重要性が高まったために起こったもので、その経緯にイギリスが深く関与したのもそのためである。また、この事件を、幕末維新期の日本の植民地化の危機を示す事例とする見解もある。[荒野泰典[2]]

〇世界大百科事典

幕末にロシア軍艦が数ヵ月対馬芋崎（現長崎県対馬市，旧美津島町）を占拠した事件。1861 年（文久 1）2 月ロシア軍艦ポサドニック号が船体修理を理由に対馬浅茅（あそう）湾の尾崎に停泊，付近を測量し，3 月芋崎に永住施設を建設して居座った。対馬藩の抗議に対し艦長ビリリョフは芋崎付近の租借権を強請，藩民との紛争も絶えなかった。幕府は 5 月外国奉行小栗忠順（ただまさ）を派遣したが効果なく，6 月藩は幕府に移封願を提出した。その間幕府は箱館奉行村垣範正を通じロシア領事ゴシケビチに退去交渉を行い，8 月ビリリョフらは芋崎を退いた。一方，イギリスは前年対馬全島の測量をし，この事件に際しても公使オールコックが幕府に協力を申し出，7 月には軍艦 2 隻を派遣してビリリョフに抗議するなど強く干渉した。これは列国の東アジア進出により対馬の戦略的位置が高まったためで，この事件はその端的な現れである。［荒野 泰典］

〇日本国語大辞典

　文久元年（一八六一）ロシア軍艦ポサドニック号が対馬に永住施設を建て永久租借権を要求した事件。島民の抵抗、イギリス公使オールコックの軍艦派遣などによりロシアは対馬を去った。

---

[2]1946 年生、立教大学名誉教授。「明治維新と『鎖国・開国』言説ー近世日本が『鎖国』と考えられるようになった歴史的経緯とその意味ー」『明治維新史研究』(15) 36-59, 2018 ほか著諸・論文多数。

文献

青山潤三『小笠原　緑の島の進化論』白水社、1998

青野正男『小笠原物語』小笠原物語編纂室、1978

秋草鶴次『十七歳の硫黄島』文春新書 544、2006

有吉佐和子『日本の島々、昔と今』集英社、1981

石井良則『戦前期の小笠原諸島』龍渓書舎、2020

石井良則『南溟に屹立する小笠原諸島の面影』弘報印刷株式会社出版センター、2022

石原俊『〈群島〉の歴史社会学』現代社会学ライブラリー、弘文堂、2013

石原俊『硫黄島　国策に翻弄された 130 年』中公新書、中央公論新社、2019

石原俊『近代日本と小笠原諸島』平凡社、2007

岩本陽児「‘Bonin Islands’ の誕生 ： この名称はいつ、どのようにして生まれたのか」東京都立大学『小笠原研究年報』（43）1-49, 2020

岩本陽児「新篇 小笠原島誌稿」『和光大学現代人間学部紀要』（13）51-62, 2020

青山潤三『小笠原　緑の島の進化論』白水社、1998

青野正男『小笠原物語』小笠原物語編纂室、1978

秋草鶴次『十七歳の硫黄島』文春新書 544、2006

有吉佐和子『日本の島々、昔と今』集英社、1981

石井良則『戦前期の小笠原諸島』龍渓書舎、2020

石井良則『南溟に屹立する小笠原諸島の面影』弘報印刷株式会社出版センター、2022

石原俊『＜群島＞の歴史社会学』弘文堂、2013

石原俊『硫黄島 ： 国策に翻弄された 130 年』中公新書 2525、2019

Eldridge, Robert D　IWO JIMA AND THE BONIN ISLANDS IN U.S.-JAPAN RELATIONS, Marine Corps University Press, 2014

大熊良一『千島小笠原島史考』しなの出版、1969

小笠原協会『小笠原　公益財団法人小笠原協会創立五十周年史』小笠原協会、2016

小笠原協会『小笠原　小笠原諸島返還 50 周年記念　セーボレー孝編著　小笠原今昔』2018 ほか、同誌の各号

小笠原返還 20 周年実行委員会記念誌編纂室『目で探る小笠原』小笠原村役場

小笠原村教育委員会『小笠原村戦跡調査報告書』小笠原村教育委員会、2002

梯久美子『散るぞ悲しき』新潮社、2005

勝海舟『海軍歴史』巻之一、国立国会図書館デジタルコレクション（インターネット公開）

菊池作次郎、田中弘之校訂『幕末小笠原島日記』緑地社、1983
倉田洋二編『増補版　写真帳小笠原　発見から戦前まで』アボック社出版局、1984
越村敏雄『硫黄島の兵隊』朝日新聞社、2006
後藤乾一『「南進」する人びとの近現代史　小笠原諸島・沖縄・インドネシア』龍渓書舎、2019
小室直樹『硫黄島栗林忠道大将の教訓』WAC、2007
「島谷市左衛門覚書」、国立国会図書館デジタルコレクション『小笠原島紀事 31 巻之二十六』所収（インターネット公開）
高崎彰「教育実践報告 小笠原の自然・歴史・文化と学校教育　前篇 ：「総合的な学習の時間」の展開と特色ある学校づくり」『亜細亜大学課程教育研究紀要 = Bulletin of the Teacher Training Course, Asia University 4』pp27-36, 2016
高崎彰「教育実践報告　小笠原の自然・歴史・文化と学校教育　後編 :「硫黄島訪島事業」と伝統芸能「南洋踊り」の継承」『亜細亜大学課程教育研究紀要 = Bulletin of the Teacher Training Course, Asia University 5』pp42-52, 2017
武市銀治郎『硫黄島』大村書店、2001
田中弘之『幕末の小笠原』中公新書 1388、1997
Chapman, David　THE BONIN ISLANDERS, 1830 TO THE PRESENT, Lexington Books, 2016
辻友衛編『小笠原諸島概史』新藤社、1985
辻友衛編纂『小笠原諸島歴史日記 : 小笠原を知るには歴史を探ろう 上・中・下』近代文芸社、1995
東京営林局『小笠原国有林の植生と学術参考保護林』東京営林局、1975
東京都『東京都産鳥類目録　昭和 49 年度』東京都公害局自然環境保護部、1975
東京都立大学小笠原研究委員会『第 2 次小笠原諸島自然環境現況調査報告書』東京都立大学、1991
東京都立大学小笠原研究委員会編『世界自然遺産小笠原諸島ー歴史と自然文化ー』朝倉書店、2021
中尾隆之『地図の本 37　小笠原諸島』日地出版、1984
星典『小笠原は楽園』アボック社出版局、1995
松尾龍之介『小笠原諸島をめぐる世界史』弦書房、2014
待島亮『小笠原戦跡一覧』創英社／三省堂書店、2003
宮本元道『小笠原島真景圖』江戸後期、国立国会図書館デジタルコレクション（インターネット公開）
山口遼子『小笠原クロニクル』中公新書ラクレ 185、2005
ロング、ダニエル編著『小笠原学ことはじめ』南方新社、2002